

唐むろ作方

是は草木育草に詳なり

をかむろ

是は人によりて大小あるべし、まづ二間に九尺程ならば、入口四尺、窓一尺に二尺程なるを一つあけて吉、此割を以て大小にて程をし、又一間に四尺位なるむろならば、入口三尺程、窓は無共吉、方角は東西南うけて吉、晝は障子をたて、夜は土戸を引べし、鼠の用心大節なり、

穴藏むろ

山の手にかざれり、深さ四尺許、横堅かぎりなし、上へ葉にて屋根をつくりて可也、上なるは、をかむろの如く作、内を三尺も堀、穴藏にしたる、是上也、室高さ五尺程にて吉、

〔草木育種後編 上〕變花。催花。の法

凡花の非時に發くもの堂花といふ、亦温棚にて開かしむるものも、亦堂花唐花などいふ、是助け長するの類といふも、亦都下競ひ其早きこと以壯觀とす、花鏡曰、以紙糊密室、鑿地作坎、縛竹置花其上、糞土以牛溲馬尿硫黃、盡培溉之功、然後置沸湯於坎中、少候、湯氣熏蒸則扇之、以微風、花得盡然融澈之氣、不數朝而自放矣、是近時の穴蒸の法に似たり、梅櫻桃李都て春暖の氣を得て發くものは、皆此法にてよし、霜に逢ふもの別してよし、其法は日あたりの山の横へ横穴を堀り、形竈に類す、入口狭くして三四尺計り、中間は四五尺の廣さなり、中檀へ竹をあみて棚をつり、上にねれごもをしき、其上へ盆栽を並べ、霧を吹かけ、棚の下へ埋火をおき、こもにて穴の口を塞ぐときは、温氣昇りて俄然花開く、亥かあれ共太陽の光を得ざる故に色薄し、日にあてる時は色を生ずるなり、尤日に當るにも紙を隔て當る方よし、又薦にてちひさき小舍を作り、竹を縛みて棚とし、上へ樹花を並べ、四方をこものぬらしこもにて口を塞ぎ、下へ剛炭を大火爐に入れ花に霧を吹かけ、